

フリウリ語の *cemût*¹⁾ と *come* : 疑問詞的用法と非疑問詞的用法
cemût e come : introduttori delle frasi interrogative e non interrogative in friulano

山本 真司

Shinji YAMAMOTO

0. はじめに 本稿では、フリウリ語における、疑問文などの導入辞²⁾ *cemût* およびそれと近接した意味・用法を持つ語 *come* を取り上げる。文法書や辞書などの文献、また、聞き取り調査から³⁾ 得られた用例に基づいて、この2つの語の意味・用法が、さまざまな変種ごとに、どのように拡張・縮小していくのかを観察したいと思う。また、適宜、対照のためにイタリア語を参照することにする。これは、理論的必然性と言うよりも(類似の現象は多くの言語に存在するのだから)、イタリア語が、ロマンス諸語の中のいわゆる大言語の中で、フリウリ語と歴史的にも系統的にも近い言語であり、また、フリウリ語を記述する際の媒介言語として最も頻繁に用いられてきたという事情による。

1. 疑問詞としての用法とそれ以外の用法 疑問詞と同形の語が、同時に接続詞などとしても用いられるという現象は様々な言語に見出されるであろう。例えば、次のようなイタリア語の用例においては、*quando vieni a Napoli* という語の連なりが、一方は疑問文として、もう一方は時を表わす従属節として認識されるが、両者は、少なくとも分節音素のレベルでは同音であり、区別がつかない。

1. a) *Quando vieni a Napoli?* 「君はいつナポリに来るのか？」

b) *Quando vieni a Napoli, fatti portare direttamente a casa mia.*

「君がナポリに来るとき、直接私の家まで連れてきてもらいなさい」

(*vieni* 「君は来る」, *a* 前置詞「に」, *fatti portare* 「君を連れて行かせなさい」,

direttamente 「直接に」, *casa* 「家」, *mia* 「私の」) ⁴⁾

ところが、同様の場合、フリウリ語では、疑問文とそうでないもの(以下、非疑問文と呼ぶ)を形態の上でも明示的に分ける仕組みが存在していて、その点では、両者の区別は比較的明瞭であるように見える。以下、主要な点を見ていくと：

(1) **動詞の平叙形と疑問形の区別** フリウリ語においては、少なくとも直説法において、動詞に平叙形と疑問形の区別が存在している。前者においては、主語を表わす接語形代名詞が動詞に前置されるのに対して、後者においてはそれが動詞の末尾に接辞されるのを特徴とする。疑問形が用いられれば、疑問文であることは一目瞭然である。

2. a) *Cuand partišial?* 「いつ彼は出発するのか？」(Faggin p.234)

b) *Quant ch'al vignarà lui nus contarà dut.* 「彼が来る時、我々にすべてを語るであろう」(Nazzi p.164)

(partišial「彼は出発するか?」, lui「彼は」, al vignarà「彼は来るだろう」, nus「我々に」, contarà「語るだろう」, dut「すべて」)

partišial (現行の正書法では partissial となる) は partí「出発する」の未来形3人称単数男性の疑問形, al vignarà は vigní「来る」の未来形3人称単数男性の平叙形である。

(2) 従属節における「che の挿入」あるいは「導入辞の二重使用」 さらに例文 2.a と 2.b を比べてみると, 2.b のほうでは, quant (念のために付記すると, 2.a では cuand と綴られているが同じ語であり, 標準化正書法では cuant となる) の直後に, che という語があることに気がつく。このようにフリウリ語では, 従属節において, 1つの導入辞のあとに, さらにもう1つの導入辞である che が添えられるケースが少なくない。疑問文は, 通常, 独立節を構成するから, この che の有無で従属節と区別がつく。かくして, 例文 2.a, 2.b の通り, cuant が単独で用いられていれば「いつ?」の意味で, cuant che と che を伴っているの場合は「... の時に」の意味であるということになる。

(3) 間接疑問文の場合 ただし, 間接疑問文 (他の文の中に埋め込まれた疑問文) の場合は注意を要する。この場合, 直接疑問文とは異なって, 動詞は平叙形を取る。また, 埋め込まれた疑問文は従属節を構成するので疑問詞の直後に che が挿入される。その結果, 間接疑問文は, 非疑問文の意味の従属節としばしば同じ形になる。次の例の cuant che は, 例文 2b の場合と異なり, 間接疑問文の導入辞「いつ」の意味で用いられている。

3. No savèis cuant che al ven il paron di cjase. (*Messal furlan*, p.17) 「君たちは家の主人がいつやってくるか知らないのだ」 (no 否定辞, savèis「君たちは知っている」, al ven「彼は来る」, il 定冠詞, paron「主人」, di「の」, cjase「家」)

ところが, フリウリ語では明瞭なはずの疑問文と非疑問文の区別に関して, その区別のマーカーとなるはずの導入辞が, 予想されているのとは異なった現れ方をすることがある。あるいは, その振る舞いに一種の方言差が存在する (地理的なものか個人的なものかはまだ断言できないが) といっても良い。その典型的な例が 以下に見ていく, cemût と come で導入される文のケースである。

2. cemût と come フリウリ語の cemût と come は, 様態の概念「... のように」「どのように」(どちらもイタリア語では come となる) を表わす導入辞だが, その区別にはいささか問題がある。伝統的な辞書「新ピローナ」Nuovo Pirona は, おおむね, cemût を疑問詞「どのように」とし, それ以外の場合 (「... のように」) に come を使うとしているようだが, 細部に至ると明瞭でない点もある。

筆者の経験からしても, 確かに, 疑問の意味で cemût を, それ以外の用法で come を使えば, ネイティブの話者の多くに許容される話し方となる (つまり, そうしておけば, 彼ら自身の話し方と同じかどうかはさておき, 「正しいフリウリ語」で話していると思ってもらえる) ようである。以下, 筆者の聞き取り調査より例を挙げておく。

4. Cemût staie tó mari? 「君のお母さんはお元気ですか?」

(staie 「彼女は ... ですか?」, tō 「君の」, mari 「お母さん」)

5. No sâstu cemût doprâ cheste machine? Alore fâs come me .

「この機械の使い方知らないの?ならば私のようにしなさい」

(no 否定辞, sâstu 「君は知っているか?」, doprâ 「使う」, cheste 「この」, machine 「機械」, alore 「それでは」, fâs 「君はしなさい」)

なお, come のあとに定動詞の節が続く場合は, 従属節の印として che が挿入される.

6. No sâstu doprâ cheste machine? Alore fâs come che o fâs jo.

「この機械の使い方知らないの?なら私がやるようにしなさい」(o fâs 「私がする」, jo 「私」)

7. Cemût vûstu l'ûf? Dûr? Al tegamin? Jo tal fâs come che tu vûs.

「卵はどうしてほしい?ゆでたまご? 目玉焼き?⁵⁾ 君の望むようにするよ」

(vûstu 「君は望むか?」, l' 定冠詞, ûf 「卵」, dûr 「固ゆでの」, tal 「きみにそれを」, tu vûs 「君は望む」)

8. Come che o savin, doman al è un sjopar de ferovie.

「私たちが知っているように明日は鉄道のアライキがあります」

(o savin 「我々は知っている」, doman 「明日」, al è 「がある」, un 「1つの」, sjopar 「アライキ」, de ferovie 「鉄道の」)

また, 間接疑問にも直接疑問と同じように cemût が用いられるが, やはり従属節の印として che が挿入される.

9. I an domandât cemût che e stave sô mari. 「彼らは彼の母が元気かどうか彼に尋ねた」

(I 「彼に」, an domandât 「彼らは尋ねた」, e stave 「彼女は...であった」, sô 「彼の」)

以上をまとめたのが次の表である. まず, 全体が, 疑問の cemût と非疑問の come に分かれる. 前者は, 従属節をなす間接疑問文においては cemût che となる. 後者は, 定動詞の節を導く場合はやはり che を伴って come che となるが, そうでない場合(仮に「前置詞的用法」と呼んでおく)には come 単独で現れる. これを「システム1」と名づけておく.

疑問「どのように」 cemût		非疑問「のように」 come	
直接疑問	間接疑問	come che	come
cemût	cemût che		
主節	従属節		(前置詞的用法)

ここに認められるのは, 基本的には疑問・非疑問という非常に明瞭な区別で, 問題となるような点は見つからないであろう. しかも, 前章で見たような疑問文を特徴付ける仕組みに, cemût / come という語形の違いも加わって, 両者の区別は明瞭この上ないように思われる. come という唯一の語が用いられ, しかもフリウリ語の持っている動詞疑問形や導入辞の二重使用の仕組みを持たないイタリア

語とは対照的である。

3. 疑問でない cemût の例 しかし、ファッジ Faggin のフリウリ語辞典は cemût について、既に、次のような、疑問詞とは必ずしも呼べない例（同辞書の分類では間接疑問文という扱いになっているがそれはいささか無理な解釈であろう）を挙げている。

10. Che al disponi pûr di me / il Signor cemûd che j plâs

「主が、お望みの通りに、私の身についてなさいますように」

(al disponi 「彼が手配するように」、pûr 「どうぞ」、di me 「わたしについて」、il 「定冠詞」、Signor

「主」、j 人称代名詞 3 人称単数男性与格形 「彼に」、plâs 「気に入る」)

事実、実際の発話では、次のように、疑問文ではない場所に come che の代わり cemût (che) が使われる例は珍しくない。引き続き、筆者の聞き取り調査より例を挙げる。

11. No sâstu doprâ chestè machine? Alore fâs cemût che o fâs jo.

12. Cemût vûstu l'ûf? Dûr? Al tegamin? Jo tal fâs cemût che tu vûs.

(例文 6, 7 と比べて、太字部分が cemût che である点が異なるが、意味は同じ。)

しかし、すべての話者にとってこのような言い方が可能なわけではない。また、このような言い方をする話者でも、come che を使った、Alore fâs come che o fâs jo や Jo tal fâs come che tu vûs のような言い方を排除するわけではないようである。

また、次のような場合は、cemût che をではなく come che が選択される。

13. Come che o savin, doman al è un sjo par de ferovie. (例文 8 に同じ)

* Cemût che o savin, doman al è un sjo par de ferovie. ⁶⁾

また、上記のように非疑問の意味で cemût che を使う話者でも、前置詞的な用法では cemût は使えないようである (* Fâs cemût me. 「私のようにしなさい」)

このような話者の振る舞いをまとめて表 2 にした。これを「システム 2」と呼ぶことにする。

疑問「どのように」		非疑問「のように」		
直接疑問	間接疑問	① come che	② come che	③ come
cemût	Cemût che	cemût che		
主節	従属節			(前置詞的用法)

「システム 1」とくらべると、非疑問の部分が ① ② ③ の 3 つに分かれている点異なる。

なお、①と②は、日本語では同じく「のように」と訳されるが、よく見ると、違いがある。「私がするようにしなさい」「君が望むようにする」という場合の「のように」は、方法・様態を示す限定修飾を加える機能があるのに対して、「私たちが知っているように明日はストライキがある」という場合、「のように」は、何か新たな情報を付加しているわけではなく、単に指示する文の内容を確認しているに過ぎない。

4. 疑問詞の関係詞的用法については、なぜ、この方法・様態を表わす部分に疑問詞と同じ語 *cemût che* が用いられるのであろうか。実は、既に *cuant?* 「いつ」「の時に」について見た通り、疑問詞と同形の語が、(単なる間接疑問節ではない) 従属節を形成するという現象は、他の疑問詞の場合にも知られている。以下、主な疑問詞について用例を挙げておく。

dulà 疑問詞的用法「どこ」、非疑問詞的用法「… の場所に」

14. a) *Dulà larâstu doman?* (Faggin 1997, p.194) 「明日君はどこへ行くつもりか」

(*larâstu* 「君は行くのか?」)

b) *A' restârin dulà ch'a jerin.* 「彼らはその時いた場所に留まった」 (Nazzi 1977, p.164)

(*a' restârin* 「彼らは留まった」 *a jerin* 「彼らはいた」)

cui 疑問詞的用法「だれ」、非疑問詞的用法「… なる人」

15. a) *Cui vegnial?* 「誰が来るのか?」 (Nazzi 1977, p.71)

b) *Cui ch'al tâs nol dîs nuje.* 「黙している人は何も言わない」 (Nazzi 1977, p. 85)

(*al tâs* 「彼は黙する」 *nol = no al, al dîs* 「彼は言う」, *nuje* 「何も … ない」)

ce 疑問詞的用法「何」、非疑問詞的用法「… なこと・もの」

16. a) *Ce fâstu?* 「君は何をするのだ?」 (*fâstu* 「君はするのか?」)

b) *Fâs ce che tu vûs.* 「君の望むことをしなさい」 (*tu vûs* 「君が望む」)

parcè 疑問詞的用法「なぜ」、非疑問詞的用法「なぜなら」

17. a) *Parcè vaistu?* 「なぜ君は泣くのか?」 (Faggin 1997, p.234) (*vaistu* 「君は泣くのか?」)

b) *No si fidave di lôr parcè che ju cognoševe.* 「彼は彼らを知っていたので信用しなかった」

(Nazzi 1977, p.162) (*si fidave* 「彼は信用していた」, *di* 「について」, *lôr* 「彼ら」, *ju* 「彼らを」, *cognoševe* 「彼は知っていた」)

(それぞれ、従属節を形成する場合には、*che* の挿入が見られるが、その点を除けば、疑問文と同じ語が導入辞として用いられていることがわかる。)

これらの構文は、まとめると、「… であるような時・場所・人・理由については、それは … である」という形に一般化できる。⁷⁾ これらの、疑問詞的用法といわばペアーをなしている非疑問詞的用法は、伝統的な学校文法・規範文法の枠では、*cuant che* や *parcè che* は接続詞として、*ce che* や *cui che* は関係代名詞として、というように、個々別々に取り扱われてきたが、このように整理すると、並行した振る舞いをしていることがわかる。これ以降、*cemût* をも含め、このような疑問詞の従属節を作る用法のことを、仮に「関係詞的用法」と呼ぶことにする。⁸⁾

こう考えると、*cemût che* がこのような関係詞的な用法を持っているのは、たまたまではなくて、このような関係詞節を形成する用法を持つ疑問詞の一般的な傾向と軌を一にするもの考えるべきであろう(ただし、歴史的に、このような *cemût* の用法が並行して存在してきたのか、あるいは、本来

come が使われていた領域に、このような関係詞的用法への一般的傾向から、ある時点で cemût も入り込んできたということなのかは、本稿の資料だけでは明確にはできないと思われる。

5. 再び cemût / come について 以上、関係詞的用法という形で、疑問詞として用いられる語の用法が拡張されて非疑問文の領域に入り込んでいること、そして、こうして疑問詞的用法と非疑問詞的用法が密接に結びついていることが観察できた。本章では、両者の密接な関係を示すもう一つの現象を見ておきたい。それは、次のように、直接疑問文では cemût を用いる（例文4のように Cemût stăie tô mari?）が、間接疑問文には come che を用いるという話者の存在である。

18. I an domandât come che e stăie sô mari. (例文9と同じ意味)

これは、3章の場合とは逆に、非疑問文で用いられる語の用法が拡張されて疑問文の領域に入り込んでいる例であると言えよう。表に示すと次のようになる。これを「システム3」とする。

疑問「どのように」		非疑問「のように」		
直接疑問	間接疑問	関係詞的	接続詞的	前置詞的
Cemût	come che			come
主節	従属節			前置詞句 (?)

6. cemût の消失? さて、フリウリ語には、主に中部方言以外だと思われるが、直接疑問文にも come を使う話者も存在する。つまり、(多くの話者に違和感を与えるのだが)

19. Come stăie tô mari? (例文4と同じ意味)

のような言い方をするのである。結局、この話者の体系はあらゆる場合に come (che) のみを用いるということになるが、これを「システム4」としておこう。

イタリア語（およびヴェネト方言の幾つかの変種）で、やはり come のみを使用することから、このような言い方は、「純粋な」フリウリ語ではなく、イタリア語法であると感じる話者が多いようであるが、果たしてどうであろうか。二言語使用・併用のためにフリウリ語話者が強いイタリア語の影響に曝されていることは事実なので、その影響力が全く無関係であると言い切るのは困難であろうが、外からの影響のみならず、内部的・構造的な動機をも見出せないであろうか。もしそれが可能であるとすれば、システム3に引き続いて、ここにも、非疑問詞的用法から疑問詞的用法へという come の使用の拡張という一貫した傾向（それが通時的なものか共時的なものかは俄かには断言し難いが）を見出せそうである。図示すると次のようになる。

疑問「どのように」		非疑問「のように」		
直接疑問	間接疑問	関係詞	その他の接続詞	前置詞
← come の拡張・浸透の方向				

ちなみに、これとは逆に、非疑問的用法の最右端まで cemût が拡大したような変種の例は無いかというの興味深い問いであり得るが、フリウリ語に関する限りは、即答は困難である。⁹⁾

以上、疑問から非疑問の領域へ、あるいはその逆へと、導入辞の用法の拡張を見てきたが、*cemût / come* の例では、本来は疑問・非疑問の領域を明示的に区別できるはずの形態論的・統語論的な仕組みがあるにもかかわらず、一方の領域で使われる形態の用法が他方の領域へと広がっていく傾向が見て取れる、という点に注目すべきであろう。または、本来区別が明示的であるからこそ、そのような拡張がより明瞭になるというべきか。そこでは、疑問の導入辞と非疑問のそれとの関係を単に同音性に帰することは出来ないゆえ、両者に何らかの偶然以上の関係があると考えざるを得なくなる。

7. その他の疑問詞 ここでは、さらに、他の疑問詞に関しても、平行した現象が認められる（あるいは、*cemût / come* の分析で設定したような枠組みを適用することが、更なる研究のきっかけとして役に立つ）可能性があることを見てみたい。

詳しい説明は省くが、場所を表す *dulà* と *là* について、基本的には次の表のような枠組みが成り立つと考えられる。例文によって御確認いただきたい。

疑問「どこ」		非疑問「そこに」	
直接疑問	間接疑問	「のような所に」	「そこに」
<i>dulà</i>	<i>dulà che</i>	<i>là che</i>	<i>là</i>
主節	従属節		(副詞)

20. *Dulà sêstu a stâ?* 「君はどこに住んでいるか？」 (直接疑問)

(*sêstu* 「君はいるか?」, *a stâ* 「住んで」)

21. *Ti domandi dulà che tu sês a stâ* 「私は君がどこに住んでいるか聞いているのだ」 (間接疑問)

(*ti* 「君に」, *domandi* 「私は尋ねる」, *tu sês* 「君はいる」)

22. *Là che si nas, ogni jerbe e pas.* 「人が生まれる処ではあらゆる草が食料となる (諺)」

(*si* 非人称主語, *nas* 「生まれる」, *ogni* 「あらゆる」, *jerbe* 「草」, *e pas* 「それは食を与える」)

以上のような基本的枠組みを念頭において、次のような例があることを指摘しておきたい。

23. *A menin la int dulà che ur va.* 「彼らは人々を好きなところに引っ張って行く」

(*a menin* 「彼らは連れて行く」, *la* 定冠詞, *int* 「人々」, *ur* 「彼らに」, *va* 「気に入る」)

これは、*dulà* の用法が疑問詞的な領域から関係詞の領域へと拡張されている例と言えるであろう。

24. *Par rispjet j doi la man e j domandi là che sta.* (新民謡の一節) 「私は慇懃に手を差しし彼女にどこにお住まいですかと尋ねる」

(*par rispjet* 「敬意を表して」, *j* 「彼女に」, *doi* 「私は差出す」, *man* 「手を」, *sta* 「彼女は住む」)

ここでは *là che* の用法が非疑問詞的な領域から間接疑問文の領域へと拡張されているように見える。

25. *Là sêstu?* 「君はどこにいるのか？」 (直接疑問)

この例は、*là che* の用法の拡張が直接疑問文の領域にまで及んだものと見なせるのではなかろうか。

以上のような *dulà / là* の振る舞いは、*cemût / come* のそれと平行していると見えなくも無い。同

じメカニズムが働いていないかを疑ってみる必要があるであろう。なお、この他にも、筆者は、数量を表わす導入辞 *trop / cetant / tant* 「どのくらい」「…のくらい」にも同様の問題があると見ている。

8. 研究・調査の発展の方向 本稿は、現象のごく一端を紹介してみたに過ぎない。さらに考察を深めるためには、論理的な研究はもとより、現象の記述そのものにおいてもなすべきことはまだ多い。

記述をさらに精密にするためには、何よりも、調査の範囲を広げる必要がある。このようなシステムの違いが個人差なのかあるいは地理的な方言差に属するものなのか、今回のように数十人程度の調査では明確なことは言い難いので、調査地点と調査対象人数を増やして調べてみる必要がある。また、フリウリ語と近い関係にある周辺の諸言語や他のロマンス語にも調査を広げる必要があろう。

フリウリ語の研究では、その方言的変種の多様さが常に問題となる。これは、何十・何百の調査地点を網羅しなければ、言語の全体像をつかんだことにはならないという困難さを意味するとともに、その多様さの数だけ言語の持つ可能性というものがより多く実現している可能性もあり、興味深い事例も少なからず見つかるわけである。一人の研究者の手に余るこのような調査のためには、協力体制を敷いた共同研究が必要であろう。

また、フリウリ語が少数言語として法的に認められて以来、標準フリウリ語が学校教育で広く教えられるようになり、従来の方言的多様性がどのようになっていくのかが、見逃せない問題となってきた。このような変化の時代にあって、手遅れにならないうちに従来の状況を可能な限り記述・保存しておくという意味でも、フリウリ語の調査は急務と言えるであろう。

参考文献

1. 辞書

FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1985

PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, *Nuovo Pirona. Vocabolario Friulano*, seconda edizione. aggiunte e correzioni riordinate da FRAU, Giovanni, Udine, Società Filologica Friulana [以下 SFF と略す], 1992

2. フリウリ語の記述・文法

BENINCÀ, Paola, *Friaulisch: Interne Sprachgeschichte I. Grammatik. Evoluzione della Grammatica*, in HOLTUS, Gunter / METZELTIN, Michael / SCHMITT, Christian, (a cura di), *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)* vol. III, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1989, pp. 563-585.

FAGGIN, Giorgio, *Grammatica friulana*, Campoformido (Udine), Ribis, 1997

FRANCESCATO, Giuseppe, *Dialettologia friulana*, Udine, SFF, 1966

FRAU, Giovanni, *Friuli*, Pisa, Pacini editore, 1984

- ILIESCU, Maria, *Le friulan à partir des dialectes parlés en Roumanie*, The Hague - Paris, Mouton, 1972
- LAMUELA, Xavier, (a cura di), *La grafie furlane normalizade*, editions de aministratsion provinciâl di Udin, 1987
- MARCHETTI, Giuseppe, *Lineamenti di grammatica friulana*, Udine, SFF, 1952
- NAZZI, Zuan, *Marilenghe. Gramatiche furlane*, Gurize-Pordenon-Udin, Institut di studis furlanis, 1977
- RIZZOLATTI, Piera, *Elementi di linguistica friulana*, Udine, SFF, 1981
- POLETO, Cecilia / VANELLI, Laura, *Gli introduttori di frasi interrogativi nei dialetti settentrionali*, in BANFI, Emanuele / BONFADINI, Giovanni / CORDIN, Patrizia / ILIESCU, Maria, (a cura di), *Italia settentrionale: crocevia di idiomi romanzi*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1995, pp.145-158

3. 言語地図

- ASIS Atlante Sintattico dell'Italia Settentrionale, materia inediti, CNR Centro di studio per la Dialettologia Italiana, Università di Padova
- ASLEF Atlante Storico Linguistico Etnografico Friulano (in 6 voll.), diretto da PELLEGRINI, Giovan Battista, Padova - Udine, 1972-1986

4. その他

- PLACERAN, Checo, (a cura di), *Messal furlan*, Reane dal Rojal (Ud), Cjandet, 1977

注

- (1) 本稿では、フリウリ語の表記は、できるだけ現行のフリウリ語の標準化正書法に準拠するよう努めた(ただし引用では元の表記を残し、必要な場合にのみ、現行の正書法との相違を注記しておいた)。この表記法は、(エスノテキストなども)実際の発音ではなくフリウリ語コイナーの形に従って表記するという原則を立てている。ゆえに、本稿で取り上げた *cemût* も、実際には方言によって *cemût*, *cimût*, *semût*, *semut*, など様々な形で現れるが、常に *cemût* の形で表記してある。とは言い、本稿で引用した用例は、主に、コイナーに比較的近い、中部方言の話者(本文中に述べた通り、認められる変異が果たして個人的なものか地理的・方言的な差異なのか判断し難いので、各話者の細かい出身地名は記さなかった)から得られたものである(ただし、一部、カルニア方言の話者も含む)。
- (2) 本稿では、同一の語形が、疑問詞として機能する場合と、関係詞などの従属節を導く機能を持つ場合とを、1つの視野の中で統一的に扱うことを目指している。そのような意味の広がりを持つ語をどのように呼ぶか(一括して「wh 要素」などと呼ぶか、あるいは用法ごとに「疑問詞」「接続詞」「関係詞」などと呼び名を変えるか)、命名の問題が生じる。本稿では、従来の機能別の名称(「疑問詞」etc.)に加えて、上記のような包括的・一般的な意味では「導入辞」*introduttore* という用語(例えば ASIS プロジェクトなどがこの名称を用いている)を使うことにする。

(3) 書籍および聞き取り調査からの引用についてはその旨しるしてあるが、特に一定の文脈に限られない、日常会話などでよく使われる例や、2, 3語のみからなる非常に一般的な言回しは、特に出典を示していないこともある。また、本稿に関係する聞き取り調査は、1990年代の数年にわたって行なったもので、自由な会話によるものから、一定の調査票（具体的には、幾つかの文をイタリア語で用意してそれをフリウリ語に訳してもらった）を利用した、より厳密な形のものまで含まれるが、後者は、1998年から1999年にかけての現地滞在（文部省在外研修による）の際に行なったものである。

(4) 例文に添えた語注は、用例の理解に必要な最少限のためのものであって、各語句の文法的機能についての詳細な情報を供することを目的としたものではない。

(5) いわゆる「目玉焼き」のことを何と呼ぶかについては、実際の調査では「フライパン焼き」「バター焼き」のような言い方から、日本語の「目玉焼き」と似たものまで、さまざまな表現が出てきたが、本稿では、「目玉焼き」を論ずるのが目的ではないので、このような違いには立ち入らず、簡略化してもつぱら *al tegamin*（イタリア語法の響きがあるが誰にでも分かりやすい表現）を使っておいた。これからも分かる通り、調査結果を提示するに当たり、注1で発音・形態に関して述べたのと類似の問題が、語彙に関しても存在するわけだが、本稿の論旨と密接な関係が無い場合には、このような統一・簡略化した書き方をしてあることをお断りしておく。

(6) 実は、このような用法（後述の表によれば「システム2」の②に相当）にも *cemût che* を用いると答えた話者も少数ながら見つかった。ただ、それは、話者が、この例文において、「私たちが知っているように」を「私たちの知っている通りの形で」の意味に解釈したに過ぎないという可能性も否定できないので、即断は避けたいと思う。

(7) ちなみに、この一般的な定式は、この構文が数量化 *quantificazione* の問題と関連していることを示唆しているように思われる。一般に、疑問詞が、数量化の問題と深く関連していることはよく知られているが、ここではこの問題を深く掘り下げる余裕はない。

(8) このような関係詞的用法を説明するための便法として、ここに文の融合のプロセスを見る見方がある（*Chi dorme non piglia pesci*. 「眠っている人は魚を捕まえられない」 < *Chi dorme? Non piglia pesci*. 「眠っているのは誰だ? (そんな人は) 魚を捕まえられない」）。そのような融合のプロセスが、歴史上本当に起ったのか本稿では論じる余裕はない。ただ、このような従属節の用法を、疑問詞と接続詞がたまたま同じ音形をしている、ということで済ますことなく、両者に何らかの理由のあるつながりが存在すると考えようとする態度は、正しい方向を示していると言えよう。

(9) 範囲を他の言語にも広げれば、また結論は異なってくる。実は、筆者は、イタリア北東部の幾つかの方言についても類似の調査を行なっているが、それも含めた報告は、別の機会に譲りたい。

謝辞 本稿に関わる調査にあたっては、いつもながら、イタリア・パドヴァ大学言語学研究所、ウディネ大学、SFFなどの諸機関の先生方・同僚達に大変お世話になった。記して感謝申し上げる。